

36 ナンシー派とジャポニスム：エミール・ガレ

アール・ヌーヴォーの代表的な人物と言えば、エミール・ガレ（1846-1904年）が挙げられます。アール・ヌーヴォーとは、19世紀末から20世紀初めにかけて、ヨーロッパやアメリカで流行したスタイルです。花や植物といった自然をモチーフにし、曲線を使ったデザインが特徴で、建築、家具調度品や宝飾などの工芸品、絵画やグラフィック・アートなど多くの分野で新たな潮流を生み出しました。



Emile GALLÉ
エミール・ガレ

ガレは、ドイツに近いフランス北東部のナンシーで、ガラス工芸やファイアンス焼きの工場経営者の家に生まれました。1870年に勃発した普仏戦争でフランスが敗北し、アルザス地方がドイツに併合されました。しかし、ナンシーがあるムルト=エ=モゼル県はフランスに留まったため、ドイツ国民となることを拒んだ人々がナンシーに移住してきました。その中には、アール・ヌーヴォーの芸術家や職人も数多く、ナンシーはアール・ヌーヴォーの中心地となり、ガレによって「ナンシー派(école de Nancy)」が結成されました。今でもナンシーの街中にはアール・ヌーヴォー様式の建物が多く残されています。

ガレは、1878年や1899年のパリ万博にガラス作品、陶器、家具を出品し、次々と入賞して装飾工家としての地位を確立しました。日本では、ガレと言えばガラス工芸品が有名ですが、ガレは家具職人でした。また、ガレの工房では陶器も制作しました。

ガレの作品の中には、日本的なデザインが取り入れられているものもあります。アール・ヌーヴォーが起こる少し前にはジャポニスムのブームも起こり、フランスに日本文化が入り始めていました。しかし、それだけではなく、ナンシーに留学していた日本画家で植物学者でもあった[高島北海](#)との出会いによって、ガレは独自のスタイルを生み出しました。それは、ただ単に日本の意匠を取り入れた異国趣味のある作品ではなく、日本の意匠からヒントを得て考えられたデザインを取り入れたものです。日本を代表する浮世絵師の葛飾北斎(1760-1849)による絵の手本帳である「北斎漫画」の鯉をモチーフとした[ガラスの花瓶](#)は、その一例と言えます。

日本的でもなく、ヨーロッパの古典的なものとも違うガレ独自のデザインは、今も日本とフランスで愛されています。

掲載日：2023年12月1日